

PROGRAM

ワーグナー:ジークフリート牧歌 op.103 (約20分)

Richard Wagner : Siegfried Idyll, op.103

R. シュトラウス:ホルン協奏曲 第2番 変ホ長調 TrV 283 (約20分)

Richard Strauss : Horn Concerto No.2 in E flat major, TrV 283

第1楽章 アレグロ Allegro

第2楽章 アンダンテ・コン・モト Andante con moto

第3楽章 ロンド:アレグロ・モルト Rondo : Allegro molto

— 休憩 (20分) — Intermission

シューマン:交響曲 第3番 変ホ長調 op.97 「ライン」 (約35分)

Robert Schumann : Symphony No.3 in E flat major, op.97, "Rheinische"

第1楽章 生き生きと Lebhaft

第2楽章 スケルツォ:きわめて穏やかに Scherzo : Sehr mäßig

第3楽章 速くなく Nicht schnell

第4楽章 荘厳に Feierlich

第5楽章 生き生きと Lebhaft

指揮: エイドリアン・リーパー Adrian Leaper, Conductor

ホルン: サボルチ・ゼンプレーニ Szabolcs Zempléni, Horn

管弦楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2016 3/4(金)・5(土)・6(日) 3:00PM開演
兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論家)

ドイツ・ロマン派の真髄3曲

19世紀ドイツ前期ロマン派を代表するロベルト・シューマン、同じく後期ロマン派を代表する巨人リヒャルト・ワーグナー、その後継者として20世紀前半の時代まで活躍したリヒャルト・シュトラウス——今日のプログラムは、あの壮大なドイツ・ロマン派音楽の流れを俯瞰するものといってもいいだろう。

しかも、ここでのワーグナーは、いつもの豪壮な楽劇とはまったく異なる、美しい叙情的な世界を聴かせる。またR.シュトラウスも、おなじみの華麗なオペラや交響詩とは異なり、ホルンの名技を押し出したコンチェルトを披露する。そしてシューマンは、彼が歌曲やピアノ曲で示すあの沈潜した作風とはまったく異なった、堂々たるスケール感にあふれた交響曲を聴かせてくれるのだ。意外性に富んだ選曲ともいえようか。その上、この3曲は、ホ長調——変ホ長調——変ホ長調という調性の流れを持っているのである……。

ライター「必聴ポイント」



ワーグナー:「ジークフリート牧歌」op.103

これぞ真の「家庭シンフォニー」

愛妻コージマの誕生日を祝い、また愛息ジークフリートの誕生をも祝うために書かれた美しい佳曲。楽劇「ジークフリート」に登場するさまざまな美しい旋律が交錯していく。

R.シュトラウス:ホルン協奏曲 第2番 変ホ長調 TrV 283

ホルンの魅力満載、モーツァルトの協奏曲群と並ぶ名曲

ワーグナーの後継者であるドイツ後期ロマン派の作曲家リヒャルト・シュトラウスが最晩年に書いた曲。彼が愛したホルンが華麗に躍動、豊富な管弦楽がそれを包んでいく。

シューマン:交響曲 第3番 変ホ長調 op.97 「ライン」

豪壮雄大に始まるシューマンの異色作

ドイツ前期ロマン派の大作曲家シューマンの、管弦楽の分野における名作の一つ。ドイツ人が愛するライン河とその周辺の風物をイメージして作曲された親しみやすい大交響曲。

PROGRAM NOTE

曲目解説 — 演奏をより深く楽しむために 東条 碩夫 (音楽評論家)

ワーグナー:「ジークフリート牧歌」 op.103

初演:1870年12月25日 トリープシェン

巨人ワーグナーが家族のために書いた温かい作品

クリスマスの朝、ワーグナーの愛妻コージマは、どこからともなく聞こえて来る美しい音楽に目を覚ました。それは、部屋の外の階段に座を占めた15人編成のオーケストラがワーグナーの指揮で奏でている、彼女の誕生日(実際は前日なのだが、聖夜と重ならぬよう、彼女はこの日に誕生日を祝うのが常だった)への贈り物だったのである。演奏後、彼は妻に曲のスコアを手渡し、彼女に感激の涙を流させた。曲はその日、和やかな雰囲気の中に、さらに2回繰り返して演奏されたという。スコアには、「トリープシェン牧歌~交響楽による誕生日の挨拶」という文字を含む題名が記されていたが、のちに現在の「ジークフリート牧歌」に改題された。

事実、このしゃれた作品は、前年6月6日に誕生した彼らの息子ジークフリートを改めて祝い、かつ総譜の浄書が間もなく終わろうとする楽劇「ジークフリート」(4部作「ニーベルングの指環」の第3部)の完成を祝う意味も兼ねていたのである。曲中に現われるさまざまな主題は、一部(オーボエが吹くドイツ民謡など)を除けば、すべて楽劇「ジークフリート」を彩るモチーフ(動機)ばかりである。曲を開始する穏やかな旋律は、楽劇の第3幕で、かつてワルキューレ(戦乙女)だった女性ブリュンヒルデの心にジークフリートへの愛の感情が芽生える個所で現われる「愛の平和の動機(純潔の動機)」であり、そのあとには「眠りの動機」「世界の宝の動機」、ホルンが吹く「愛の絆の動機」、木管やトランペットが吹く「鳥の声」などが美しく流れ続けていく。「愛の平和の動機」が中心となる終結に向かっての美しさは、ワーグナーの作品の中でも他に例を見ないものだ。

なお初演の際の弦楽器は8人編成だったが、作曲者自身が1年後にマンハイムで指揮した時には、弦を23~27人編成に増やしている。

楽器編成

フルート、オーボエ、クラリネット2、バスーン、ホルン2、トランペット、弦楽5部

Profile

リヒャルト・ワーグナー (1813~1883)

ライプツィヒに生まれたドイツ19世紀ロマン派を代表する超大作曲家。同時代や後世の作曲家に測り知れないほどの大きな影響を与えた。13のオペラのうち、初期の作を除く「ニーベルングの指環」「トリスタンとイゾルデ」「ニュルンベルクのマイスタージンガー」「パルジファル」など10作は、今なお世界のスタンダード・レパートリーである。自ら建設したパイロイト祝祭劇場は、世界のワーグナー愛好家のメッカともいべき存在。



R.シュトラウス:ホルン協奏曲 第2番 変ホ長調 TrV 283

初演:1943年8月11日 ザルツブルク

暗黒の第二次世界大戦のさなかに生まれた明るい曲

リヒャルト・シュトラウスの父フランツ・シュトラウス(1822~1905)は、ミュンヘンの宮廷管弦楽団の首席ホルン奏者を務めた、自他共に許す名ホルン奏者だったが、なぜかワーグナーとその音楽とを猛烈に嫌っていた。当時、飛ぶ鳥落とす勢いにあった巨匠ワーグナーもこれには閉口し、彼が属するオーケストラに自作を演奏してもらう時には、あれこれ気をつかったという。それでもそのワーグナーにさえ「いやな奴だが、しかしホルンは本当に上手い」と舌を巻かせた実力を持つフランツであった。

息子のリヒャルトは、その父親の「言いつけに^{そむ}叛逆き」、のちにワーグナーの影響を受けたオペラを数多く書く大作曲家に、またワーグナーの作品をしばしば手がける名指揮者となった。だが、ホルンという楽器に生涯を通じて愛着を持ち続けたのは、おそらくその父親の影響であろう。息子は、18~19歳の時(1882~3年)に「ホルン協奏曲第1番 変ホ長調」を書いて父親に捧げたほか、その後も多くの作品の中でホルンを大活躍させていった。そして晩年、オペラ作曲の筆を折ったあとの1942年、実に60年ぶりに、まるで若き

日の思い出を蘇らせるかのように、2つめの「ホルン協奏曲第2番」——調性も同じ「変ホ長調」である——を書いたのであった。

楽章は3つ。最初の2つの楽章は続けて演奏される。ホルンのパートは「第1番」と同様に闊達な活力にあふれ、若き日の作風そのままだが、管弦楽の部分は、まさに円熟の極みに達した豊麗な音楽へと変わった。特に第2楽章は、R.シュトラウスならではの甘美な旋律にあふれる陶酔的な世界である。

楽器編成

独奏ホルン、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

Profile

リヒャルト・シュトラウス (1864~1949)

ミュンヘン生まれ。20歳を出たころから作曲家・指揮者として頭角を現し、交響詩の分野で大胆かつ革命的な作品を残した。のちオペラの分野に転じ、最初は激しい表現主義的作風でセンセーションを巻き起したが、「ばらの騎士」を転機として前衛的な作風からロマン派的な豊麗な音楽に回帰した。世紀の変わり目を生きた作曲家の中でも、最も人気のあるひとりである。晩年はナチス・ドイツの政治に巻き込まれた苦難の生涯でもあった。



シューマン:交響曲 第3番 変ホ長調 op.97 「ライン」

初演:1851年2月6日 デュッセルドルフ

シューマン最後の交響曲、壮大な気宇にあふれた名作

ザクセン宮廷指揮者でありながらドレスデン革命に参加、敗北亡命したワーグナーがチューリヒやフランス国内を逃げ回っていた1850年——彼と面識もあり、同じドレスデンに住みながらも革命活動には無縁だったロベルト・シューマンは、9月同地を去り、デュッセルドルフ市の音楽監督・指揮者として赴任した。この地では、人々から温かく迎えられたものの、彼とその妻である名ピアニスト・クララにとっては、さほど居心地は良くなかった

らしい。それは、彼が繊細な神経の持主で、あまり社会的とはいえなかったことや、指揮者としての熟練度に不足していたことが主たる原因だったようだ。やがて彼を大きな精神上の不幸が見舞うのだが、それはまた別の話——。

だが、このデュッセルドルフ時代にあっても、ロベルト・シューマンの創作力は、充実をまだ保っていた。10月には「チェロ協奏曲」を書き、さらに11月~12月上旬にはこの「第3交響曲《ライン》」を完成した。これは彼の4つの交響曲の中でも、最も気宇の壮大な、開放的な気分を備えた交響曲であり、また親しみやすい旋律を含んだ交響曲でもある。実はこれに先立つ9月末に、彼はクララとともにケルンの大聖堂を訪問し、強烈な印象を受けていたのであった。特に目の当たり見た枢機卿就任の荘重な儀式の光景は、「荘重に」と指定された第4楽章の曲想に反映されたといわれている。

楽章は5つ。第1楽章冒頭に出る第1主題は、シューマンが書いた音楽の中でも、最も雄大なものであろう。第2、第3楽章での民謡的な旋律の親しみ深さも忘れ難い。そして終曲——第5楽章も生き生きとしてはいるが、どこかにシューマンらしい愁いを感じられなくもない。楽章の中ほどには、当時としては大胆なリズムの交錯個所がある。

なお、彼の交響曲のうち、現在「第4番」とされている「二短調」は、「第1番《春》」に続いて作曲されながら、「ライン」のあとに改訂されてからの出版となったため、番号が最後になった。したがってこの「第3番《ライン》」は、シューマンの書いた最後の交響曲になる。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部

Profile

ロベルト・シューマン (1810~1856)

ザクセンのツヴィッカウ生まれ。ドイツ前期ロマン派を代表する大作曲家の1人。繊細な神経の持ち主で、変化に富んだ情緒的で自由な形式による作風を得意とし、特に歌曲とピアノ曲の分野において、斬新で画期的な作品を多く生み出した。優れたピアニスト、クララと大恋愛の末に結婚したが、彼女の知名度の高さに対し、ずっと引け目を感じ続けていたようである。後年は精神的な危機状態に陥り、精神病院で壮年の生涯を閉じた。

